

関西における大学野球連盟の誕生と展開

一近畿大学野球連盟に焦点を当てて一

三宅 弘人

キーワード：大学野球連盟，誕生と展開，自主性，集結と独立

1. 研究の動機

2019年3月、大学スポーツの統括組織であるUNIVASが設立され、大学スポーツの改革が進められつつある。その一方、これまで、大学スポーツの統括組織は、いかなる議論を重ねて現在の運営方法に至ったのかに興味を持った。また、私が所属していた神戸大学硬式野球部は近畿学生野球連盟に加盟しており、その展開は東京六大学野球連盟などと異なる複雑な経緯を辿っている。その違いに興味を持ったため、関西の大学野球連盟を研究対象とすることにした。

2. 研究の目的と意義

本研究では、近畿学生野球連盟に焦点を当て、関西における大学野球連盟の誕生と展開を明らかにすることを本研究の目的とする。大学野球という、歴史ある大学スポーツの組織編成の経緯を研究することで、スポーツ組織のあるべき姿に関する議論を活発にする一助となることを本研究の意義とする。

3. 先行研究の検討

大学野球に関する研究は、大学野球選手の動作解析に関するものや、学生野球憲章や学生野球の自治に焦点を当てたものは見つかったが、大学野球連盟に関する史的研究は見つからなかった。

4. 研究の方法

本研究では、以下の時期区分に従って、近畿学生野球連盟の誕生と展開の経緯を明らかにしていく。

1) 近畿学生野球連盟の創立期 (1923~1951)

2) 関西の各連盟の集結期 (1952~1982)

3) 関西の各連盟の独立期 (1982~2019)

1)では近畿学生野球連盟のルーツである官立三校野球連盟・近畿六大学野球連盟の誕生と展開について明らかにする。

2)では関西大学野球連合の結成により、近畿・京滋・阪神の三連盟が関西六大学の下部組織となった経緯、その後の展開の詳細と解散の背景を明らかにする。

3)では連合解散後、それぞれ独立した関西の各連盟の再編成の詳細、また特に近畿学生野球連盟に焦点を当て、その展開について明らかにする。

使用する史料は、近畿学生野球連盟または他連盟の記念誌・議事録・ホームページ、神戸大学硬式野球部OB会報誌、新聞記事などを扱う。

5. 本論

5.1 近畿学生野球連盟の創立期 (1923~1951)

大学野球は、学校間の対抗戦から開始され、チーム数の増加に伴ってリーグ戦へと推移した。1923年、官立神戸高等専門学校（現・神戸大学経済学部・経営学部・法学部）、大阪医科大学（現・大阪大学医学部）、大阪高等工業学校（現・大阪大学工学部）の三校により、官立三校野球連盟が設立された。その後、関西における大学野球は、統括組織加盟校の増加と減少を繰り返しながら展開を見た、戦中期に至ると、軍部主導による野球禁止・大学野球連盟解散の憂き目に遭う。戦後、学生野球の指導監督を民間に取り戻し、大学野球は自主的な展開を見せる中、1947年に近畿六大学野球連盟が結成され、1952年には近畿大学野球連盟へと改称され、加

盟校も増加した。リーグ戦では近畿大学が一強で、全国大会の常連となっていた。

5.2 関西の各連盟の集結期 (1952~1982)

近畿大学野球連盟の実力に不満を持つ近畿大学が関西六大学野球連盟への加盟を目指し動き出す。初めは単独行動であったが、関西の大学野球界全体を巻き込み、最終的に関西大学野球連合を結成した。連合は関西六大学を頂点とし、近畿・京滋・阪神の三連盟が下部リーグを形成、関西六大学と下部リーグ優勝校で入れ替え戦を行った。当初の目的通り、近畿大学は関西六大学に加盟したが、関西六大学の伝統校が下部リーグに転落するなどの波乱を見せる。その後、関西六大学の伝統校側から、「入れ替え戦廃止・関関同立が中心のリーグ固定化」の意見が上がり、さらに、連合の運営に関して、関西六大学と他三連盟の摩擦などもあり、1982年関西大学野球連合は解散した。これに伴い、各リーグの再編成が行われた。関西六大学の伝統校は理想の加盟校でリーグを再編成するため、一度関西六大学を解散した。

5.3 関西の各連盟の独立期 (1982~2019)

旧関西六大学の伝統校は新たに近畿大学・京都大学を加え、関西学生野球連盟として再始動した。また、旧関西六大学に所属していた伝統校以外の大学は加盟校を新たにし、関西六大学野球連盟を再編成した。その他の三連盟は上記のリーグ再編成に伴い、加盟校を減らしたが、およそ連合結成前に戻る形になった。こうして、関西の大学野球は現在のような五連盟が並列・独立して存在するようになった。連合解散の混乱もあり、五連盟間の衝突もあったが、時間が経つにつれて協調精神が育ち、1994年、「関西における大学野球の活性化」のため関西地区大学野球五リーグ対抗戦が始まった。このころから関西の五連盟が足並みを揃えるようになった。

近畿大学野球連盟に関して、2004年には現在の近畿学生野球連盟へと改称し、加盟校も十九校まで増加した。また、リーグ戦は、連合解散からしばらくは国公立勢の優勝が目立ち、毎年

優勝校が入れ替わっていた。その後、奈良産業大学（現・奈良学園大学）の一強時代が続き、近年再び国公立勢が優勝するなど、リーグ内の実力が拮抗し始めた。

6. 結論

大学野球連盟の運営において、自主性を重んじる風土は、戦時中に行政の監督下にあったことへの反発から形成されたことが分かった。また、関西大学野球連合の結成は、関西独自のものであり、近畿大学が関西六大学野球連盟加盟を目指した末のものだったことが分かった。入れ替え戦によって実力校が集まった関西六大学であったが、伝統校が下部リーグに転落し人気は下降するなどにより不満が募っていった。そして、連合は解散、関西の大学野球界の混乱を招いた。このことから、実力主義への移行は、単にリーグ加盟校を入れ替えるという目的では達成できなかったことが分かった。連合解散後、関西六大学が解散したことで、それまで連盟間に存在していた格差が無くなり、関西の五連盟が対等な立場で運営を行うようになったことが分かった。また、近畿学生野球連盟のリーグ戦について、私立勢と国公立勢の実力には開きがあったが、近年、その差は切迫してきている。その理由として、時代の変化に則して野球技術向上の過程が最適化されたことにより、国公立大学にも高い技術を備えた選手が増えたからだ と考察する。

6. 今後の課題

本論文では、大学野球が自主性を重んじる風土の中で展開してきたことを明らかにしてきた。しかし、現在の大学野球が成熟したものであるとは言い切れず、連盟ごとに独自の運営が任されている以上、今後も新たな展開を見せる可能性がある。大学野球のさらなる発展に期待し、本研究の締めとする。

(指導教員 秋元忍)